



月歩学歩



「げっぼがっぼ」と読んで欲しいが、その意味は、“月日を歩き、学んで歩く”ということ？



特集

「わくわく体験 研修 そのⅢ」

【普段の自分たちの生活と違う環境に身をおいて、身体で感じたことは今すぐには気づかないこともあるかもしれません。学生たちに少しでもプラスの変化があればと思います。利賀村が第二の故郷のようになり、個人的に出かけていくようなことがあったら素敵なことだと思います。】(由田 新)

2-8P

その他の内容

キャンパス・ライフ

- ◆ 「教育実習I」「保育内容演習」1年間の学び
～子どもとの出会いとかかわりから学ぶこと～ (片川 智子) 9-12P
- ◆ 育ちあいのひろば「たいむ」餅つき (中野 望) 13P
- ◆ 東北スタディーツアーII 報告会 (東 沙也加) 14-15P



特集 わくわく体験研修III

生活と文化を考える～富山県利賀村研修

担当：由田 新



前年度に引き続き、9月の15日から21日にかけて、富山県南砺市利賀村へ1週間のフィールドワークへ行きました。参加者は6名です。

南砺市利賀村（なんとしとがむら）は、高岡市から岐阜の方向へ入った緑豊かな山間にあります。東五箇山と呼ばれる地域で、屋根こそ変えてしまいましたが合掌造りの家屋が多く残っています。残念ながら、近年、過疎化が進んでおり、若者が少なく、高齢者のみの世帯が増えている地域です。

学生たちは、何軒かのお宅に宿泊・生活をともにさせていただいたり、保育所へボランティアとして通ったりしながら村での生活体験を行いました。今回も、あえて「宿」に泊まることはせず、商工会の斉藤嘉久氏*のご紹介で村の一般の皆さんのお宅に宿泊させていただきました。数カ所でお世話になりましたが、どこのお宅でもあたたかく迎え入れてくださり、様々なお話をしてくださいました。何にも代え難い、ありがたい体験であったと思います。

岩魚のつかみ取り、そば打ち、紙漉きといった体験活動も行いましたが、学生たちの感想にでてくるのは、やはり、村の方とのかかわりでした。保育園での子どもたちから高齢の方まで

様々な世代の方と関係をもちました。その総数はざっと数えても80人、いやそれ以上の方と触れ合ったと思います。気がつけば、村を移動していても挨拶をする相手がどんどん増えていきました。村のみなさんは私たちをあたたかく迎えてくださり、気軽に声をかけてくださいます。人見知りだといっていた学生も気分は村の一員になっていました。

普段の自分たちの生活と違う環境に身をおいて、身体で感じたことは今すぐには気づかないこともあるかもしれませんが。学生たちに少しでもプラスの変化があればと思います。お世話になった方に年賀状を書いた学生もいたようです。利賀村が第二の故郷のようになり、個人的に出かけていくようなことがあったら素敵なことだと思います。

学生たちは、さまざまな体験から何を感じたのか…。以下に、学生たちのレポートの抜粋を載せたいと思います。

最後に、利賀村の皆さん～私たちが快く泊めてくださった皆さん、保育園の皆さん、様々な体験におつきあいいただいた皆さん、そしていろいろなコーディネートをしてくださった商工会の皆さん、どうもありがとうございます。改めてお礼申し上げます。

2年生：及川 あかね

利賀村で一週間を過ごして、自然の中で生活することの楽しさや大変さ、集落だからこそその人のつながりの大切さを知ることが出来ました。

利賀村へ行ってまず驚いたのは町との距離でした。市街地からさらに遠く、何本もの細いカーブが続く道を車でどんどん登って行って、どこまで行くのか検討もつきませんでした。村でも一軒一軒の間がとても広く、夜中に家の前で打ち上げ花火をやっても怒られないのはすごいと思いました。また、利賀村の人同士の交流の深さに驚きとうらやましさを感じました。お互いのことをよく知っていて、誰とでも笑って楽しそうに話しているのは、私の住んでいる地域ではあまり見かけなくなりました。お互いを気遣って、皆が情報を共有し合っていることは少し怖いところもあるけれど、いざという時などとても頼りになると思いました。

私は、もともと人見知りをしやすく、初対面の人とすぐに話をすることは苦手です。でも利賀村の皆さんはどなたも気さくな方ばかりで、話が上手で、自分が緊張する間もなくずるりと話に入らせてくれました。誰

と会っても笑顔で接してくれて、おいしいご飯をご馳走してくださり、お腹も心もととてもあたたかく満たされました。たった一週間という短い期間で出会った方はざっと数えて86人かそれ以上でした。まるで第二の故郷のように過ごした利賀村での一週間は、これからの私の人生に新たな一歩をもたらせてくれたと思っています。機会があればまた利賀村へ行ってあたたかい皆さんに会いたいです。

2年生：押尾 まどか

9月にわくわく体験研修で富山県南砺市利賀村でのフィールドワークに参加しました。利賀村では村の保育園で保育実習をするグループと村の生活体験をするグループに分かれて活動し、それまでの実習を通して自分の中で保育について迷いができていた私は利賀村の方々の家で生活体験をさせていただきました。

生活体験は農作業を中心に木工などでした。私には初めての事ばかりでしたが、作業自体よりも、その時に関わった方々の様子が強く印象に残りました。初めて農業体験をさせて頂いたIさんというお宅では畑の世

話と田んぼでの稲刈りをしました。まず畑仕事の手伝いをさせて頂いたのですがとても力のいる作業でした。また、作物の様子をよく観察し丁寧に扱うことも求められる難しいものでした。しかし、そこのお母さんは「畑の手入れは女の仕事」と、一人でトマト、豆類などの世話をしているといっていました。私は高齢の女性が機械の力も借りずにたった一人で力と集中力のいる仕事をしてきたということにとっても驚きました。趣味のようなものとも言っていましたが、好き嫌いや暇つぶしで何十年も続けることは難しいのではないかと思います。昔からの女性の仕事として炊事洗濯家計管理などは予想していたのですが、それ以外に畑の維持管理の責任者という役目は全く想像していませんでした。その他にも田んぼの作業もしていて働き詰めだと思いました。しかし、お母さんは私たちが帰る時まで疲れた様子もなく快活に笑っていらっしやいました。

農作業と木工をさせて頂いたNさんの家には1泊させて頂き、丸1日お世話になりました。Nさんは仕事を辞めてから今までやっていなかった家事が面白いと本当に楽しそうに動いていました。

Nさんは私たちにご自身の壮絶な過去や現在の夢を語ってくれました。Nさんは花やハーブを使った有機農業や蕎麦栽培を通しての国際交流など様々なことに取り組まれているのですが、若い時から体の具合が悪く、明るくおおらかに見えたNさんが自分の不調、死と向き合っていることを知りました。数年ずつ目標とやらなければいけないことを明確に設定して暮らしているそうです。私自身は毎日をただ過ごしてきたこともあり、Nさんの「とりあえず〇年」という話し方がずしんと胸に響きました。

2年生：高岡 あゆみ

おばあさん（とてもお元気でしたが）と一緒に農作業の体験をして、体力を使う作業なのに若い人がいないことは1つの家だけでなく、村全体での問題になっているのだと強く感じました。また、昔の村のお話を聞いた時も、若い人がいないと苦勞することが多いという話がありました。若い人が村にいない…。やはり山の中にあるということことで町へ買い物に行くにも時間がかかるし、高校が村の中になく、進学することで自然と村を出る選

択になっていること等が関係しているのではないかと感じました。

1週間、村の生活を体験してみて、体力を使う作業が多かったような気がします。私が生活体験をさせていただいたお宅では、高齢のご夫婦で住んでいる方もいました。健康に過ごすことはもちろん大切ですが、どうしても体調がすぐれない時、けがをってしまったとき、いろいろと大変ではないでしょうか。息子や娘と一緒に住んでいなければ尚更です。しかし、そこを村全体でカバーし合える、助け合えることを昔からしているのが利賀村なんだと思います。家が密集しているわけでもなく、すごく広いのに玄関の鍵が開いていたり、他の人が困っていれば快く受け入れたり。山の中であるが故、移動手段が少ない頃から村で助け合っているのではないかと強く感じる事ができ、利賀村に住みたいという気持ち

になりました。若い人が少なくなっていくのは残念なことです。けれど、利賀村のように人が助け合える地域が残っていてほしいです。村での生活はすごく楽しかったので、また機会があれば行きたいです。

2年生：渡邊 絵里香

私は利賀村でいろんな人のあたたかさを感じました。

泊めていただいたお宅では、村の人たちがご馳走を持ってきたりして集まり、大勢で談笑する日々で、村人同士のつながりの深さや私たちへのもてなしを温かく感じました。談笑する中で、初めてお酌をしたり、普段あまり話すことの無い世代の方達と話をすることで、少し大人の階段を登った気がします。

また、台風のために山菜採りに行けなかった時、宿泊先のお母さんがおはぎ作りや春巻き作りをさせてく



れたり、総合センター(編注*本来は宿泊施設ではない所)に泊まっている時は、村の方がお風呂や洗濯機を貸してくれたり、総合センターでは不安だろうからともう一泊させてくれる方がいたり、前日の夜に急に頼んだのにも関わらず、翌日に編み物を教えてくれる方もいて、村の方の大きな優しさに支えられてこの研修は成り立ったとともに楽しく過ごせたと思います。

ささゆり保育園での保育体験では、子どもの主体性について考えさせられました。ささゆり保育園では、10人の子どもたちがそれぞれに好きな遊びを集中してやっていて、保育者はあまり中に入っていないでした。ある日のトラブルの場面でも保育者はあまり中に入らず、子どもたちは思う存分気持ちをぶつけ合い、つかみ合いになったり、謝られても許せない気持ちを素直に出していました。その後、自然と仲直りする姿をみ

て、保育者が手を貸さなくても子どもたちの力で解決できるのだと思ったとともに、これが自然な子どもの姿だと感じました。

また、運動会の練習では、子どもたちに競技のやり方を尋ねて確認をしたり、どうすれば平等に人数配分できるかを子どもが悩みながらよく考えて、解決しようとする姿を見ました。私は、子どもが主体となって活動が行われていて、とてもよいと感じました。

当初、利賀村では体験活動を楽しみにしていました。確かに、そば打ちや岩魚のつかみ取りなどは初めての体験でとても楽しくいい思い出になりました。しかし、全体的な活動を思い返すと、体験自体より村の方との関わりが楽しかったように思います。

2年生：市原 望美

利賀村で印象に残ったことは2つ



あります。

1つ目は、ほぼ毎日、保育園に通い、子どもたちとたくさん触れ合って全力で遊んだことです。

今までの実習では、全力で遊んでいるつもりでもどこか子ども相手だから加減を...と思い、少し力を抜いて遊んでいました。しかし、利賀村の保育園の保育方針や保育者の方々の子どもに対する接し方を身近に体験することで、自然と「子どもだから...」と思うことがなくなり、全力で遊ぶことができたと思います。

少し園に慣れてきた時に全員（10人）でリレーをする機会がありました。園の先生たちからも「本気で走ってね」と言われていたので、全力で走りました。すると、リレーで負けてしまったチームの女の子が泣き出してしまいました。私は、「やっぱり全力で走ってはいけないのかな？」と思ったのですが、終わったあとに園の先生から「お姉さんが全力で走ってくれたから、〇〇ちゃんは悔しい、もっと頑張ろうと思えたんだよ。」と言葉をいただきました。本当にその出来事が印象的で、この利賀村のこの保育園で経験することができてよかったです。

2つ目は、たくさんの人たちと出会

って生活を共にするという自分の地域では体験できないようなことをたくさん体験できたということです。

村の人たちは、家主も交えて（私たちがいたからかもしれませんが）毎日ご飯を食べながらいろんな話をしたり、電話をしなくても自然に1つの家に集まったり・・・と普段の自分たちの生活では見ることのない光景を見ることができました。また、今回の研修ではいつも一緒にいる人たちだけではなく、はじめて話す人も一緒だったので、最初はお互い探り探りでしたが、村の人たちの雰囲気や毎日一緒に生活をしてきたからか、だんだん打ち解けてきて、研修が終っても話すようになりました。

*斉藤嘉久氏は、これまでのイベント型の地域交流ではなく、都市部の若者が村のイベント企画に参加する、お年寄りのためのボランティア活動を行う等、違う形の交流を模索されています。

<http://www.mlit.go.jp/common/000213049.pdf>（南砺市商工会利賀村事務所）



キャンパス・ライフ

「教育実習Ⅰ」「保育内容演習」1年間の学び
～子どもとの出会いとかかわりから学ぶこと～

片川 智子

1月24日をもって、1年間の「保育内容演習」（1年生科目）の授業を終えました。この授業は、4月の入学間もない頃から、幼稚園にて実習させていただき、子どもと出会い、かかわり、様々な出来事や思いを素材として保育について学んでいくものです。実習後、各自その内容をレポートに記し、そのレポートをもとに翌週以降は学内で授業を行います。実習は概ね月1回実施し、実習→レポート作成→授業（3週）→実習→レポート...というサイクルで展開してきました。

振り返れば、4月、初めての幼稚園実習でどこで何をしたら良いかも分からず、とにかく勇気を出して子どもに挨拶をしてみたこと、子どもに声を掛けてみたものの一緒に遊べずますます焦ってしまったこと、自分だけ子どもと遊べていないと落ち込んでいると子どもが「遊ぼう」と声を掛けてくれた喜び...多くの嬉しさや戸惑いを感じ、

レポートにも記していたことを思い出します。徐々に学校生活に慣れてきた頃、学内での授業が面倒になってしまっただけでなく子どもで楽しむ姿から、もう少し頑張ろうと前に進んできた学生もいました。徐々に、自分が緊張した、自分が嬉しかった、だけでなく子どもの気持ちを考え、子どもにとってどうなのかという意識を持つようになり、11月には、子どもたちに楽しんでもらえるよう、子どもたちにとって意味のある体験になることを考えながら、初めて子どもたちの前に立つて行う「部分実習」も経験してきました。

12月の最後の実習では、多くの学生が1年間の子どもの成長についてレポートに記していました。それは、色々なことが出来るようになった子どもの姿を具体的に書いたものもあれば、4月からの1人の子どものかかわりを

追ったものもありました。このように一人一人の子どもの成長を実感しながら、共に成長した1年だったと言えるでしょう。

学生一人一人それぞれの実習体験と学びがありますが、その一端として、1年間の学びのまとめとして書かれた、学生のレポートの一部を紹介したいと思います。

<教育実習I・保育内容演習

1年間の学び>

1年生：磯貝 夕奈

実習を通して印象に残ったエピソードとして「これ!」と思えるものが正直なところありません。その時の様子を思い出すことはできますが、どんなことがあったのかを具体的に思い出すことはできません。でも、それがどうしてなのかも分かりません。実習に手を抜いていたつもりもないですし、クラスの中に気になっていた子がいないわけでもありません。ですが、今考えてみると、その子に対して、自分が気になっていたにもかかわらず逃げていた頃がありました。

実習の初めの頃から、その子が先生

と関わっている姿を見て、少し対応が難しい子なのかなと感じていました。その子をAとします。私自身、全く関わらないわけではありませんでした。自分から関わるということはあまり無かったと思います。ですが、一度だけ深く関わったと感ずることがありました。しかし、この時も自分からAのもとへ行ったわけではありませんでした。

戸外遊びの時のことです。戸外遊びの時間が終了となり、園児たちが片づけをし、保育室に戻ります。ですが、Aだけは戻りませんでした。どのような声を掛けたか覚えていませんが、Aは私が声を掛けたら保育室に戻ってくれました。Aは他の人が言うことにあまり耳を傾けず、すぐに先生や実習生に一方的に話を続けたり質問をし続ける子でした。ですが、Aにも比較的話を聞いてくれる時、自分でできる時があるというのを知っていた私は「今日はそういう日だ」と思い、自分から関わってみることにしました。

帰りの支度をしている時、Aだけが絵本を読んでいた。私は「今日はいける日」と思っていたので、Aに支度をしてもらおうと様々な声掛けをしました。ですが、Aは絵本の内容を私

に質問し続けます。しばらくして、それを見ていた先生が「少しそっとしておいて」と私に声を掛けました。私は、Aの気持ちを考えずに「今日はいける日」という、あくまで私の視点だけで関わってしまったことを反省しました。また、見守るといふことの大切さを知っていたにもかかわらず、それを見失ってしまっていたことに反省をしました。(中略)

授業では、自分が書いたエピソードを読み、そのエピソードについて皆からの意見や質問に答えるという授業が一番印象に残っています。実際に私がエピソードを読む立場になって、色々な質問や意見を受けた時、自分一人では気づかなかつたことを沢山気づかせてくれました。その中で、一番刺激になったことは、どちらかと言うと私の意見に否定的な意見や質問でした。率直に言うところ「私はこの対応は違うと思うけど、どうしてこのような対応をしたのか」という質問でした。私は、自分のとつた対応について、そうすべきだと思つてしたのですが、それを否定されて、最初はとても驚きました。けれど、そのように言われたことで、自分の対応について考えるきっかけにな

り、とても刺激になりました。違った意見を言われていなければ、私は自分の関わりについて考えていなかったと思います。この事例検討の授業は、私のレポートをより深い、意味のあるものにしてくれたと思います。

もう一つ印象に残っているのは、自分のレポートに、同じクラスで実習していた学生からコメントをもらったことでした。同じ配属クラスなので、私の実習中の様子を知っているし、自分が悩んだ場面を知っている人から「私ならこうしたと思う」という意見をもったり、私の行動を褒められたりして、新しい考えに触れて勉強になったし、頑張ろうという気持ちをもりました。

これらのことを振り返ると、新しい自分の課題を発見しました。それは“子どもから逃げない”ということでした。はじめに書いたように、私は気になっていたAから逃げました。逃げても実習はできるし、学べると思いますが、実習の内容を考えると逃げないで向き合った方が内容は濃くなると思います。1年間の実習を通して、保育に携わるといふことは“子どもが好き”という気持ちだけではでき

ないということを理解しました。ですが、嫌で逃げ出したくなった時、“子どもが好き”という気持ちがあるから頑張れるということも、同じように理解しました。実際、Aから逃げていた気持ちも“Aが嫌”だからではなく、Aを嫌な気持ちにしてしまったらどうしようという気持ちでした。でも、関わらなかつたら嫌な気持ちどころか、自分に対しての思いも持ってもらえないということに、今振り返って気づきました。

この1年間の幼稚園実習は、私の、保育者を目指すものとしての考えを、良い意味でも悪い意味でも変えてくれ、次の実習をより意味のあるものにするためのヒントをくれた実習となりました。

保育は、私、子ども、他の大人、がかかわり合って成っています。そして、それぞれに思いや考えがあります。このレポートからは保育の場で、また学内でもそのような人同士のかかわり合いがあるのだということが分かります。そして異なる意見をただ自分と違うと排除するのではなく、意味の

あるものとして考えてみることで、それぞれの人の意思に目を向け、尊重し合うことが表されているように思います。これはきっと保育の学びだけでなく、自分の生活そのものにもつながることなのではないかと思います。

本教科の授業は終わりましたが、レポートにもあるように、これから2週間という長期の実習を経て学生の保育の学びは更に深まっていきます。この1年での気づきが、どのように広がり深まっていくのか、またそんな学びをどのように保障していけるのか、まだまだ共に考えていきたいと願っています。

最後に、このような1年間を通しての実習と学びが可能になるのは、本学の実習形態を理解してくださり、ご協力くださっている幼稚園（今年度は県内11園）のお陰です。子どもたちと先生方にいただいた多くのことを大切に、学びを深めていきたいと考えています。

育ちあいのひろば「たいむ」 餅つき

中野 望

育ちあいのひろば「たいむ」では、1月18日にもちつきを行いました。この日は朝から雪が降っていましたが、前日から楽しみにしていたのでどうしてもという気持ちがありました。その強い気持ちが通じたのか子どもたちが来る頃には雪もやみ、お日様が出ていました。

もちつきのもち米をふかすところからするのは、実はこの日が初めてでした。「こんな感じかな?」「この鍋で蒸かせるのかな?」と私たち自身、たくさんの不安を抱いていました。初めからつくのではなく、回りながらもち米を潰していくこと等、現場で働いている時、こんな感じだった...と試行錯誤しながらやっていました。

どのくらいの時間、米を蒸かしているのかも分からず、柔らかすぎてしまったり、柔らかすぎてしまった後は、ちょっと早めに蒸し器から出しました。しかし、実際についてみると、今度は早すぎたのか芯が残っていました。つくことより蒸かす方(加減)が難

しいと感じました。

子どもたちは「ペッタンするー!」と、自分の番はまだかと嬉しそうに臼の横に列を作っていました。そして、子どもたちを優しく見守るお父さんもいました。普段のたいむにはお父さんがあまり来ないので、今回のもちつきでお父さんと子どもたちのかかわりを見ることができ、とても新鮮でした。お父さんも子どもたちの前で張り切って餅をついていました。そして、その後は、子どもたちはもちつきよりも食べること、食べることよりも砂遊びをする方が楽しくなっていました。

また、この日はスタートアップ・カレッジが行われており、高校生も参加してくれました。今はこのような機会でもないと、なかなかもちつきはしないので、このように子どもたち・保護者・学生・スタッフが入り混じって、初めての経験をし、いろいろなことを試しながらでしたが、おいしい餅をつくことができたと感じています。



東北スタディーツアーII 報告会

東 沙也加

1月11日（土）本学の講堂にて、8月に実施した東北スタディーツアーの3団体（大東文化大学・ひかりの子学園・千葉明德短期大学）の参加者による報告会を開催しました。スタディーツアーから帰ってすぐは、個々に感じたことや強い思いなどをまとめたものの、報告会の準備が中々進まず、月日が経つごとに、「就職活動が忙しい。」「余裕がない。」と、学生同士のやり取りがうまくできず、この報告会の開催が危ぶまれていました。そのような時、「東北の人たちはどういう気持ちで『今』を過ごしている？」と加藤次郎先生（本学非常勤講師）の一言で、忙しさを理由に甘えていた気持ちが薄れ、報告会を開催することができました。

今回のスタディーツアーでは、被災地を訪問した回数によって感じ方にバラつきが見られたのと、学生だけではなく、一緒に行った教員はどのようなことを感じてきたのかという点から、「被災地訪問者すべて対

等に報告しあう会～被災地に足を運んだ時間と、それぞれが感じ考えたことの相違～」のテーマのもと、学生、教員関係なく、「一緒に訪問した人」としてそれぞれが発表に臨みました。また、このスタディーツアーに参加したことのある卒業生4名も足を運んでくれ、グループディスカッションに参加していただきました。ディスカッションで話したことをグループごとに発表してもらおうと・・・

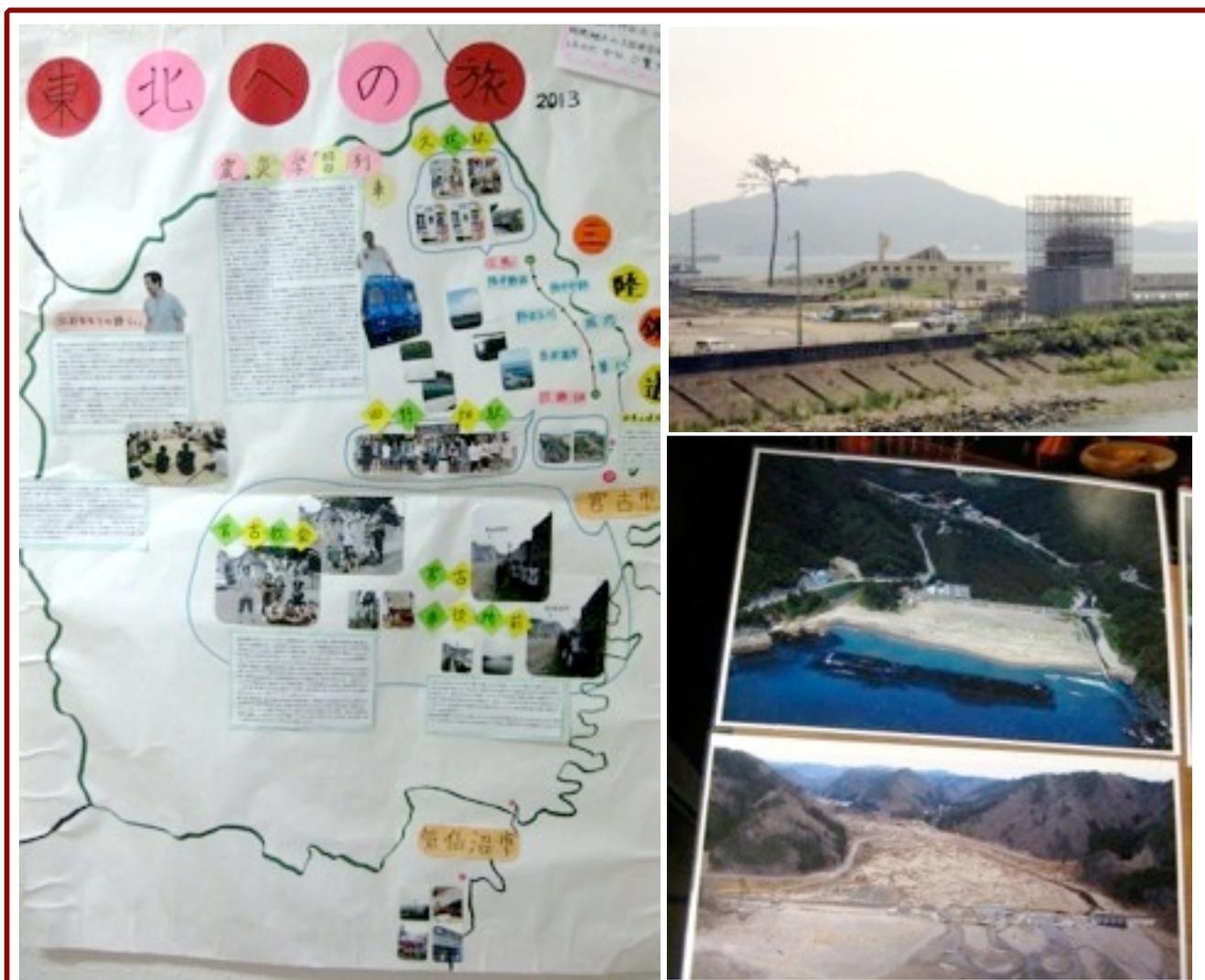
- ★訪問した回数は様々だけれど、行ったことに対して自問自答をしているよう思う
- ★行く度に見え方も違うし、考え方も変わってくる
- ★目に見えたものだけでなく、心まで考えられるようになりたい
- ★同じ場所に行くことが大切なのだと思う 等々

顔を合わせたのはスタディーツアーと今回の報告会の2回だけにも関わらず、ディスカッションでは、発表

しきれなかったそれぞれの感じていた本当の思いを包み隠さず話し合えたように思います。

中学生、高校生、短大生・大学生、卒業生、教員と様々な年齢層の人が「東北」という一つのことについて真剣に考え、意見を交換し深め、繋がろうとしている場というのは中々ないと思います。私自身も、この場にいることができ、とても貴

重な体験をさせてもらえたと思っています。明德と宮古市の距離は657km。頻繁に訪ねられる距離ではないけれど、東北の地で出会った方々との繋がりを忘れることなく、感じてきた思いを周りに発信していきたいです。来年度もこのスタディーツアーが開催されるのであれば、今回築くことができた「繋がり」をきっかけに、参加したいと思いました。



▲「ひかりの子学園」の中学生・高校生が作成した東北スタディーツアーの記録



2月の予定

1/27～2/8 + 2/17～3/1

保育実習Ⅰ（1年生）

2/1

一般入試

2/7

研修生スクーリング

2/8

公開授業

2/12

保育体験Day

2/13

学びの成果発表会

保育実践研究会

2/15～2/18

研修生沖縄保育研修

2/22

第4回スタートアップ・カレッジ

一般入試

保育実践研修会

2/23

40回生同窓会

2/28

研修生スクーリング

保育体験Day

▲1年生最後の「あそび基礎演習」合同授業では、新聞紙を素材に、造形・音楽・身体・言語と各分野からアプローチし、遊びました。

「あそび基礎演習」造形授業で学生が作ったカレンダー ◀

編集後記

秋の「わくわく体験研修」をずっとレポートしてくれた2年生の報告も、今月で終了します。とても充実した日々を富山県の利賀村等で過ごし、考えさせられた思いでいた姿が目に見えます。

2年間の保育者養成期間、あっという間ですね。2年生はもうすぐ卒業で、当日の髪型や袴の色等が話題になることも多いです。近づいてきた2年間の「学びの成果発表会」に向けて準備したり、卒業レポートをまとめたりして、何かと自身の姿を振り返ることが多くなるこの時期です。

そして、1年生たちは今、まさしく実習の最中で、「保育内容演習」の中で学べたことを、今度は保育所／施設で活かすことができます。1年生のこの時期の実習は基本的に観察実習と位置づけられていますが、それでも毎日のように課題に取り組んでいる学生も多いように感じます。そこで手前みそのような印象になりますが、私が巡回訪問にお邪魔した園で、何度も「実習生が子どもの発達の姿をよく捉えている」と言われ、さすがに嬉しく思いました。授業は後少して終わりますが、学ぶことに終わりはないので、面倒がらずに今後も取り組んで欲しいです。（深谷）

発行：千葉明德短期大学

千葉市中央区南生実町1412

Tel:043-265-1613

Fax:043-265-1627

mail:tandai@chibameitoku.ac.jp

URL:http://

www.chibameitoku.ac.jp/
tandai.html

編集

田中 葵

深谷 ベルタ

鶴田 真二



読者の皆様へ：『月歩学歩』に対するご意見、ご感想をメールにてお寄せ下さい。